

大正四年六月二十一日発行 三冊綴り 毎冊一圓一月發行

(禁 轉 載)

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷九十二第

行發日一月八年四和昭

## 論 叢

清涼飲料稅論 . . . . . 法學博士 神戶 正雄

限界經濟學と制度經濟學 . . . . . 文學博士 米田庄太郎

勞銀の理論 . . . . . 文學博士 高田 保馬

## 說 苑

經濟學史基礎論 . . . . . 法學士 石川 興二

幕末の商社 . . . . . 經濟學士 菅野和太郎

セイの販路說に就て . . . . . 經濟學士 谷口 吉彦

シニピイトホフの景氣循環論 . . . . . 經濟學士 靜 田 均

## 雜 錄

伊太利の財政經濟近況 . . . . . 經濟學士 有 井 治

經濟理論と經濟史 . . . . . 經濟學士 堀江 保藏

近著外國經濟雜誌主要論題

## 經濟理論と經濟史

堀江保藏

G. Brodhnitz 教授は、Recent Work in German Economic History (1900-1927) と題して獨逸に於ける經濟史研究文献を概観し、その際 Sombart の Der Moderne Kapitalismus を紹介批評した。<sup>1)</sup> 曰く『彼の所謂資本主義は抽象概念即ち理論の對象である。經驗對象としての資本主義の彼の如き取扱方は、歴史的とは考へられぬ云々』と。Sombart は之に對して、'Economic Theory and Economic History なる一文を公にして多<sup>2)</sup>

くの經濟史家の態度を批判し、理論と歴史との相關々係を説き、自己の立場を明かにして以て彼の大著に對する同種の非難を辯護しようとした。一歴史觀として傾聴すべき點が少くない。依つてその大要をこゝに紹介したいと思ふ。

—

Sombart は先づ一般に歴史家の執るべき態度について述べて居る。即ち個々の事實を取扱ふにしても、政治状態を取扱ふにしても、歴史家が最も注意しなければならぬ事は、全體との關係に於て考へるといふ事である。歴史の主題としてこの『全體』なるものは無數に存在するが、先づ時間(例へばルネッサンス)、内容(例へば銀行)、空間(例へばロンドン市)の三つに大別する事が出来る。これ等は又更に包括的なる『全體』に従屬する。即ち Universal History に迄到達して、遂には『人類存在の謎』を解く事となるのであるが、この人類歴史の意味の解決は哲學に俟たねばならない。科

1) The Economic History Review, Vol. I. No. 2, pp. 324, 325  
2) ibid, Vol. II. No. 1

學者は經驗し得る現象の意味及び相互關係の研究に満足しなければならぬ。デイルタイは現象界を人間精神の投影として國家・法律・經濟組織・宗教・哲學・美學等の方面に分ち、之を文化體系 (Kulturssysteme) と呼んで居る。此等の文化體系は人間精神を表明する窮極のものであつて、總ての歴史的事實は結局何れかの文化體系に歸属すべきものである。

特殊科學は此等の文化體系を獨立に研究し、いはゞ事實の合理的研究或は智的把握の夫との態様である。政治學・法律學・經濟學等と呼ばれるものが、これである。然らば、歴史家は特殊事實を環の一節として見るべきものなる以上、諸種の文化體系を熟知してその根本要素及び相關々係を十分理解しなければならぬ。

この理解に最も大切なのは特殊科學の理論である。即ち好事家たらざらんとする歴史家は、彼の研究部門に於ける理論を十分知らなければならぬ。理論なくして歴史なし、理論は歴史の科學的敘述の前提條件である。

二

この議論は歴史が科學として先づ顯はれた往古以來、不變の眞理を持つて居る。Thucydides も Polybius も共に政治及び戰術に通曉して居たため不朽の著作を残す事が出来た。成程政治史に於ては、理論的基礎の必要は、他の歴史に於けるよりも明白でない。けれども理論の必要は勿論のことであつて、政治史家に君主國と共和國との別、或は異つた政治組織の下に於ける状態の差別等の辨別力がないとは考へられぬ。他の部門の歴史に於ける理論の必要は益々明白である。法律の知識無くして法制史を書かうとする者はない。宗教史家は宗教の理論を欠く事を得ない。戰史家亦然り。かくの如き事を今更らしく述べる事は大人げないけれども一部門の歴史にはこの議論が徹底して居ない以上致し方がない。それは經濟史である。或る代表的經濟史家は、理論を無用視するのみならず、却つて之を研究の障礙物とさへ考へるのである。

經濟史に注意を向けて居る多くの、否大部分の歴史家は、經濟學に依つて提出せられて居る理論に殆ど無智である。勿論或る程度のもは持つて居るが、いはゞ常識的のもので科學的理論と稱せらるべきものではない。その結果編纂物は無數に出るが、徒らに量を増加するに過ぎない。事實は珠數玉の様なものである。珠數を作るには絲が必要である。結合物無くしては如何なる權威も満足な作品を生み出す事が出来ない。

T. Rogers の老なる著作がその例である。偉大なる努力の結晶ではあるが、經濟史、或は單に農業及び物價の歴史をなして居るだらうか。物價史等と稱するが如きものは有り得ない。何となれば物價は經濟發達の各階段に應じて異つた意味を持つものであつて、それ自身何ら意味なきものだからである。

經濟史が理論を無視する人々に依つてのみ書かれたとする事は間違ひかもしれない。堅實な理論的基礎の

上に立ち、經濟史と見られる多くの著作が存するからである。然しよく見れば經濟理論よりも寧ろ政治法制度の理論に基くものが多いのである。この點は已に A. Dopsch が強調した所であつて、實際は Dopsch が指摘した以上であると思はれるから、こゝに二の著例を擧げる。(一)は政治史的經濟史である。一般歴史家が觸れた經濟史の部分は政治の發達に意義あるもの、又は政治組織に依存するものとして記述せられて居り、Ranke を以てその代表者とする。(二)は法制史的經濟史である法制史的研究が經濟史に役立つ事の大なるはいふ迄もない、が他の科學に據らねばならぬ事は經濟史研究にとつて一の不幸である。この立場の代表者は獨逸の Von Maurer、英國の Ashley である。(三)は經濟政策的經濟史である。經濟史事實を經濟生活よりも寧ろ經濟政策に立脚して探索し處理する。Cunningham 及び Levasseur の大著は即ちそれである。兩者共に經濟生活に即して居ないから、各種の生産及び分配の組織、變革及びその條件原因に就て、我々の得る

3) Thorold Rogers, A History of Agriculture and Prices, in 7 vols. 1866-

所は至つて少い。

四

以上の如き状態は何に起因するか。正當な考慮無くして研究に着手せる歴史家の罪か。否、非難は寧ろ經濟理論家に歸せらるべきである。經濟史家を正順に導く理論を提供し得なかつたからである。以下少しくこの事を吟味しよう。

先づ理論經濟學の雄である古典派經濟學説及び限界効用學説は如何。兩者共寧ろ自然科學的理論であつて文化科學に屬するものとは認め難い。如何なる状態の下に於ても普遍的に齊一に妥當する經濟原理を求め、又その云ふところは經濟的均衡の理論のみであつて、經驗的な生産・經濟組織・經濟的動機等に何ら及ぶ所がない。即ち『經濟人』なる語が代表する如く、非實在的抽象的世界の内に彷徨して居るのであるから、經濟史の基礎として役立つ事はない。かくの如き理論は多々あるが、その中重商學派によつて強調せら

れた『國民經濟』なる範疇を見よう。この範疇は Kant の有機體説を採つたものであつて、經濟史家によつて時代別の標準として屢と用ひられた。けれどもこの概念それ自身に於ては如何なる種類の有機體が國民經濟によつて作られてゐるかを示す事が出来ない。國民經濟は手工業的基礎の上にも、資本主義的或は社會主義的基礎の上にも同様に成立し得る。我々が知りたいのは、國民經濟内に於ける個別經濟單位の結合の性質或は原理である。

多くの經濟事實の分類は數多の經濟史家に依つて試みられて居る。經濟發達階段説と總稱するものがそれである。支配的生産形式に依つて時代や國民を區分せんとする試みは往古からあつた。例へば Aristoteles の如きはそれである。彼は金儲けと財の自然取得とを對比して人間生活を分類して居るが、この方法は後世に傳つて十八世紀中最も喧傳せられ、Smith の大著にも甚だ重要な地位を占めて居る。獨逸に於て最初此の説を用ゐたのは List である。此を大成したのは Schönl-

Beitragであつて、彼によれば經濟の發達は、狩獵・漁撈・牧畜・定住農業・手工業と商業・工業の六期に分たれる。この區分の標準は、生産の三要素(勞働・土地・資本)が欲望充足に貢獻する性質及び程度、即ち生産状態である。この概念は經濟組織等の餘りに重視されない初期に於ては或種の意義を持つけれども、高度に發達せる社會には適用し難い。我々の問題とする所は生産状態の内容即ち社會階級・分業・技術・分配組織・經濟單位等であるからである。生産状態なる語を、彼の如く、『經濟生活状態』の意味に用ゐようとも、何ら問題の解決とはならぬ。

Biicher は右と異り、財が生産者から消費者に渡る道程の長さを標準として、封鎖的家内經濟・都市經濟・國民經濟の三階段に分つて居る。この區分は多くの史家が承認する所であり、各階段が夫々特異性を有する事は疑ひ得ない。けれども交換道程の長さがこの區分を特徴づけて居るとは信じられぬ。例へばパンを得るのに、小さいパン屋からであらうと資本家的工場から

であらうと、或は消費組合からであらうと、生産者から消費者へ渡る道程の長さに一向變りはない。かと思つて此等の本質的に異なる經濟組織を同一物と見做してよからうか。勿論社會主義の國家に於ては利益を目的として生産せらるるのではないと答へるであらうが、この事は取りも直さず時代の區分に他の標準を求めて居るものである。

最後に Hildebrand の自然・貨幣及び信用經濟の區分は如何。重點は自然經濟貨幣經濟の別ではなく、寧ろ自給經濟と否との別に置かるべきである。又貨幣經濟と信用經濟との區分は、Cohn も既に指摘せる如く、貨幣の最重要な價値尺度なる機能を無視しての議論である。正しくは現金經濟と信用經濟とに分たるべきであらうが兩者共やはり貨幣經濟である。況んや高度の經濟組織の下に於ては、信用は財の交換と關係なき特殊の事柄たるに於てをや。

## 五)

- 4) Gustav Schönberg, Handbuch der politischen ökonomie
- 5) Gustav Cohn, Grundlegung der Nationalökonomie, 1885 (System der Nationalökonomie, erster Band)
- 6) 本節の詳細は、W. Sombart, Die Ordnung des Wirtschaftslebens, 2<sup>te</sup> Aufl., 1927. 參照

然らば經濟現象を區分し叙述し且つ相互關係を求むるに餘す所なき一概念は何か。『經濟組織』(The economic system)これである。經濟組織とは、物質的欲望を充足し準備する一態様の、一單位として理解され得る所のものであつて、その構成要素は、(イ)經濟活動を決定する目的、動機乃至主義の總體、換言すれば經濟精神、(ロ)經濟活動及びその相互關係を決定する外的組織乃至統制、換言すれば經濟の形式、(ハ)外部の自然を意志に順應する様に變形する爲に用ゐらるゝ技術的工夫、の三者である。この三者は更に具體的には左の如き態様をとつて現はれるのであつて、その現はれ方如何によつて經濟組織に差異を生ずるのである。

(イ)精神(經濟目的)——(一)自然的欲望充足主義、利益主義(二)傳統主義、合理主義、(三)連帶主義、個別主義(ロ)形式(統制及組織)——(一)制限、自山、(二)生産手段の私有又は公有、(三)經濟的民主主義又は貴族主義、(四)集中、分散、(五)自家用生産、市場生産、(六)個人的企業、社會化された企業

(ハ)技術方法——(一)經驗的、科學的、(二)靜止的、變革的、(三)組織的、非組織的

經濟發達の各時代は、右の如く理論的に區分せる各經濟組織とまさに符合する。經濟時代とは經濟生活が一定の經濟組織に屬する特徴を具現する歴史上の一定時期をいふ。而て經濟組織の繼起には規則的な順序を見る事が出来る。この順序は、一經濟組織内に次の組織の繼起を擔ふ力が内在する限り、心理法則に基くものであつて、經濟的民主主義と貴族主義との交互交替の如きはその最も明白なるものである。手工業的組織は民主主義、資本家的組織は貴族主義、而て今や勞働組合消費組合等、次の民主主義的組織に移らんとする傾向が隨所に現はれて居る。

經濟組織を離れて經濟生活をする事は出来ない。即ち總ての經濟組織は既にその萌芽を他の經濟組織の中に持つて居るのであつて、一時代の末期は次の時代の初期を形成する。これを混合期或は過渡期と呼び、發達の頂點に達した純粹期と區別する。初期資本主義・

高度資本主義・後期資本主義の別は即ちそれである。

以上の如く、經濟組織の概念及びそれに基いて立てられた經濟生活の理論は、經濟史研究に實果を生ましめる事が出来る。經濟史家を、自家の系統的理論なき危険、及び異質の主題を取扱ふために立てられた原理に従ふ危険から救出す事が出来る。然るに *Der Moderne Kapitalismus* は、歐羅巴經濟史をその發端より現在に至るまで取扱へるものなるにも拘らず、歴史として承認せられない。『彼の資本主義は抽象概念即ち理論の對象である……高度資本主義時代なる語は近代經濟發達の歴史的記述とは甚だ相違してゐる』等と。而も『全歐羅巴に共通する資本主義の現象の明白なる分析は彼の功績に歸せねばならぬ。然し……』といふに至つては、まさにこの著作の歴史としての價值を裏書きするものである。以下この事を若干論じよう。

## 六

先づ一般歴史と特殊歴史との別を吟味しなければな

らぬ。歴史は常に個別的なる實在をその個別性に於て叙述せんとするものである。對象が具體的事實なる以上時間空間に制約せられるのは已むを得ないが、然し個別は特殊と異なる事に注意しなければならぬ。一定條件の下に於て時、場所に拘らず同様な状態を以て反復生起する事柄を代表的或は集團的事柄と呼び、その取扱に當つては、個々の個別を單獨に取扱ふ場合と異なる。後者は即ち個別の特殊の取扱ひ即ち特殊歴史である。英蘭銀行史、中世經濟史の如きそれである。此の如き特殊歴史は今尙優位を占めて居るのであるが、特に經濟史に於ては集團的事柄の一般的取扱こそ大切であり、史的研究の効果が多いのである。

然し乍ら一般性の程度は立場によつて異なる。倫敦銀行史は英國銀行史にとつては特殊歴史であり、後者は又一般銀行史にとつては特殊歴史である。然らば *S. S. Schar* は如何なる立場から資本主義を見たか。問題は、近代資本主義の發達に對して指導的な本質的な、而も歐洲各國に共通する經濟現象は何れであるかにあ



るを以て、勢ひ各國の個別の特種性を無視し、一般的特徴を捉へる事に全力を盡した。即ち廣い範圍の一般的立場に立つたのである。然ればとて特殊研究を怠つたわけではない。特殊研究は一般研究を益と豊富にするものである。勿論些末な點に於て誤謬がないとは云へぬ。けれどもこの立場からすれば、白耳義銀行の設立が一八三三年であらうと、一八三五年であらうと、重要性に變りはない。要は例證の事實が適當の時、適當の場所に割當てられて居ればよいのである。かくの如き過去の取扱方はいはゞ最廣義に於ける『一般歴史』であつて、モノグラフや極度に特殊化した研究を補ふに不可欠のものである。

要之、Sombart は、經濟理論と經濟史との協同關係の闡明、換言すれば統一を企て、その原理を『經濟組織』に求め、經濟組織の推移を心理法則に歸して居るのである。經濟發達の心理學的説明は、ロマンチズム乃至アイディアリズムの流れを汲めるものであらう。而

も問題の社會學的公式化といふ點に於て、彼は決定的にマルクスの影響を受けて居る。その結果、近代資本主義を、歴史上一回限りの、且つ歐羅巴精神の顯現せる、歴史的個別性であるとし、却つて經濟發達の國民的。特性は問題外に置かる事となつた。かくて彼は一部批評家からは歴史家に非ざるが如き非難を受くるに到つたものである。けれども、從來靡々行はれたるが如き經濟發達の一面的觀察を排除し、包括的なる經濟組織の概念及びその發展の理論を以て經濟の發達を理解せんとする點に於て、又經濟史にありては、他の部門の歴史と異り、特殊性よりも寧ろ一般性を重視すべきであるとなせる點に於て、經濟史研究上參考に資すべきものが少くないと思ふのである。